

謝謝！台湾 謝謝！傳兄

交流協会台北事務所
経済室 主任 渡辺 明夫

4年余りの台湾での生活も終わりを迎えようとしています。本当に色々なことがありましたが、あつという間の出来事であったように思えます。

2009年5月24日、桃園国際空港に降り立ち、台北市内に向かう車の中では期待と不安で一杯であったことが昨日のこのように思い出されます。当時はまだ羽田空港と松山空港の直行便が就航しておらず、空港から市内までは高速道路を使っても約1時間を要しました。今とは隔世の感があります。

現在2期目に突入している馬英九総統は、よく公式の場で「今の日台関係は過去40年間で最高の関係にある」とおっしゃいます。本当にそうだと思います。この「最高の関係」の中で仕事ができただけは、私にとって本当に幸運であったと思います。事実、近年の日台関係は大きく進展しています。前述した羽田空港と松山空港の直行便就航やオープンスカイの実現、また、先日大盛況のうちに幕を閉じた宝塚歌劇団の台湾初公演や来年開催が予定されている日本での故宫博物院展は、日台間の人的往来、経済、文化面での交流促進に大きく寄与しています。

日台関係の進展を象徴するハイライトはやはり、本年4月10日の日台漁業取決めの署名でしょう。しかし、私が経済を担当する立場からかもしれません。2011年9月22日の日台投資取決めの署名も日台関係における歴史的なエポックメイキングであったと自負しておりますし、そこに微力ながらも携わることができたことを大変誇りに思っています。余談ですが、署名式の模様は当地のテレビニュースでも流され、私もちらっとですが映し出されたためか、翌日事務所内でちょっとした有名人となりました。これもいい思い出です。

また、昨年春の外国人叙勲において、旭日重光章を受章された故辜濂松・中国信託ホールディン

グス会長に対し、昨年12月にお亡くなりになる前に同叙勲を伝達できたことは、本件受章に至るまでの過程に携わった者として本当に感動しました。受章者の方々に対する叙勲の伝達を拝見していつも感じるのですが、受章者ご本人はもちろんのこと、奥様をはじめ、ご家族が大変喜ばれている姿を見ると本当に良かったと心から思います。

私は、妻と長女を帯同して台湾に赴任しましたが、この台湾での生活は、家族にとっても人生におけるかけがえのない財産になったと思います。特に長女は現在、台中市にある寮付きのインターナショナルスクールに通っており、我々両親の帰国後も卒業まで通わせたいと考えています。日本に居るときはまだまだ考えが幼く、消極的だった長女が、両親の住む台北市から離れて一人で生活する中、今ではなかなかの英語を駆使しながら、積極的に物事に取り組むようになってきたことは、本当にうれしく、頼もしく思います。彼女の生活をサポートしてくださった皆様に心から感謝を申し上げたいと思います。

一方で、私にとって台湾での生活のみならず、人生においても衝撃的な出来事が起こりました。2011年3月11日に発生した東日本大震災と、私のアシスタントであり、公私ともにパートナーであった、陳傳旺・当所経済室副主任の病死です。

東日本大震災については多くを語るつもりはありませんが、世界でも類を見ない破格のご支援を頂いたここ台湾の地に、地震発生時に家族共々赴任していたということに運命を感じざるを得ません。あの津波の映像は現実とはとても思えないものでした。そうした中、地震発生直後から、当所には台湾の皆様から人的、物的、資金的な支援に関する数多くの申し出がありました。

私は、当所における震災対応業務として、プレス対応班に所属しました。3月14日には台湾各地の消防士からなる救援隊が外交部長及び内政部

消防署長の同席の下、松山空港内で結団され、日本に向けて出発しましたが、私もその現場に居ました。台湾の方々をよく、1999年9月に発生した台中での大地震の時に日本は真っ先に救援に駆け付けてくれた恩を忘れていない、今回は台湾が恩返しをする番だ、とおっしゃっておられましたが、その言葉をまさに政府レベルで示して頂きました。一人の日本人として、心から感謝の気持ちで一杯になりました。

同18日夜の震災チャリティー番組には、馬英九総統夫妻が出演され、自ら全台湾住民に募金を呼びかけられました。実はテレビ局から当所に対しても出演依頼がありました。非常に考えさせられることでもありましたが、最終的には、「日本人の考え方として、募金は、当事者が募るものではなく、第三者からの善意をありがたくお受けするものだ」として、出演自体はお断りをしたのですが、当日は台湾の皆様のおかげでテレビを見て、本当に感動しました。

同年9月、NNA台湾という現地情報発信メディアより、「震災から半年、台湾から日本を救う」と題したシリーズのうち、当所による渡航制限の解除に向けた舞台裏について取材を受けました。私からは震災対応に際しての当所の苦労したことやエピソードも併せて紹介させて頂きました。この取材を通じて、自分は、ここまでご支援を頂いた台湾の皆様に対してできることは何だろうか？と考えるきっかけとなりました。未だに自分は台湾の皆様になにかできているのだろうか、と自問自答していますが、日台投資取決めの署名や外国人叙勲の受章など、少しは台湾の皆様喜んで頂けたかな、とも思っています。

しかし、帰国を間近に控え、私の親愛かつ尊敬するパートナーであった、陳傳旺・経済室副主任が胃ガンに侵され、本年4月14日、享年60才で帰らぬ人となってしまいました。陳さんはその誠実な人柄と優しい笑顔で当所職員をはじめ、多くの台湾当局などの関係者から、「傳兄」と慕われて

いました。私も着任以降、公私にわたり本当にお世話になりました。当局発表のプレスリリースや当地報道振りの翻訳、台湾側関係者へのアポイント申し入れや会見時の通訳など、陳さんがいなければ当地での仕事はうまくいかなかったでしょう。それは私だけではなく、歴代の当所次長、副代表ご経験者、経済室主任や貿易相談室主任をご経験された方々全員が思われているはずです。また、私達家族は陳さんの奥様やご子息とも何回か食事をさせて頂きましたが、ご家族の暖かい雰囲気は陳さんの人柄そのものだなと感じました。

他方で、仕事上のパートナーであった自分ももっと早く陳さんの身体の不調に気付いていれば、と自責の念に駆られたことも事実です。ご家族に対しても本当に申し訳ない思いながらも、陳さんの死を実感することは殆どありませんでした。

同29日に執り行われた告別式では、当所の樽井代表から弔辞を読み上げて頂くなど、滞りなく進み、いよいよ最後のお別れの時となったのですが、ご遺体の安置室に入るか入らないかの瞬間から、陳さんに対して申し訳ない気持ちで一杯になり、涙が止まらず、殆ど陳さんの顔を見ることはできませんでした。ようやく陳さんが亡くなられたことを実感したのだと気付きました。陳さん、何もしてあげられなくて本当にごめんなさい。私のできることは、陳さんのご冥福と、ご家族のご多幸を心から祈念するばかりです。

私達家族が台湾で4年余の間、本当に充実した生活を送れたのも、台湾の皆様のおかげで、代表、副代表、部長をはじめとする事務所の皆様のご指導やサポートがあったからこそと思います。本当に感謝の気持ちで一杯です。また、長女は引き続き台湾で頑張っていますので、変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。私は日本に帰国しても、日台関係の更なる発展ために微力ながら貢献していく所存です。

最後に大きな声で言わせてください。謝謝！台湾！謝謝！傳兄！！